

## 論文

# ジュスティヌ・ジュリエット物語に登場する雷

鈴木球子

### 要旨

18世紀フランスの作家サド侯爵は「美德の不幸と悪徳の栄え」というテーマに固執し、美德を信念とするジュスティヌと、悪徳の道を突き進むジュリエットという、対称的な姉妹の物語を繰り返し書き続けた。この物語の各版の結末において、ジュスティヌは落雷によって非業の死を遂げる。本稿では、この雷の場景を支える様々な要素について検討した。

落雷のシーンには、サド自身の体験が影響を及ぼしていた。侯爵は長年に渡って、牢獄に収監されていた。ジュスティヌ物語の落雷のシーンには、牢獄の窓から見た雷雨の様子が反映されている。

近代以前にはしばしば、雷に打たれて死ぬ者は天罰を被った悪人であると考えられていた。しかし18世紀になると、科学の発展に伴い雷の実体は明らかになりつつあった。サドも、雷の正体は電気であると理解していた。彼は近代以前の雷に対する解釈を物語に取り込むのだが、美德の徒であるジュスティヌが天罰を受けて死去し、かたや悪人が罰せられないという矛盾を描くことで、その内容を反転させてしまう。

サドは火山や地震といった自然現象にも興味を抱いている。当時、リスボンで起きた地震はヨーロッパ全土に衝撃を与え、善良で全能であるはずであった神への疑問を呼び起こした。サドの作品に登場する悪人たちは、化学や物理学的アプローチによって、これらの自然の破壊的力の謎に迫ろうと試みるものの、完全には説きあかすことはできず、己の無力さを痛感する。サドは自然災害に対する科学的説明を受け入れる一方で、それでも人間の知では理解することのできない現象や出来事が存在することを認めざるを得ないのである。ジュスティヌ・ジュリエット物語で描かれる雷は、古典主義的な雷のテーゼからの脱却と、化学による自然現象の説明、そして宗教的にも化学的にも解き明かせない自然災害の破壊的な力の描写の、三つの間を揺れ動いている。

キーワード：18世紀、リスボン地震、サド、美德、自然

## 【目次】

はじめに

- 1, ヴァンセンヌ城とバステューユ牢獄の雷
- 2, ベンジャミン・フランクリンの実験
- 3, 自然災害とサド

まとめ

## はじめに

サドには、しばしば道徳的な非難が打ちかかる。彼の作品中で描かれる暴力的な迫害シーンや、悪人たちが犯罪を正当化するために繰り返される論議は、サド自身が引き起こしたスキャンダルとの関連性を疑われるものであり、彼の生前中から既に激しい批判の対象となっていた。サド没200年を迎えた今日になって<sup>1</sup>も、サドに加えられる断罪は完全にその手を緩めたわけではない。

第一次大戦後、シュルレアリスムはサドに対する評価を変化させた。シュルレアリスト達は、サドの過激さに革命性のモデルを見ようとし、一方でそれを精神分析的に解釈しようと試みた<sup>2</sup>。他人の苦痛に喜びを感じる性癖を指す、「サディズム」という言葉が生まれたのもこの頃である。だが、精神分析的視点は問題を広く一般化し、サドの作品を抑圧された人間の欲望の表れのひとつとして相対化することによって、その他の要素－啓蒙思想や十八世紀の風習、社会背景など－の影響について考える余地を失わせてしまう傾向を含んでいた<sup>3</sup>。

上記の二つの視点は、犯罪の描写をサド個人の異常性に帰するか、人間の小児病的欲望の一例証の反映と見なすかという違いはあるものの、いずれにしてもサドの作品に登場する人間たちの悪事や悪意に注目して論を進めている。だが、ジュスティーヌとジュリエットという、対称的な性質の姉妹を主人公とする物語の結末に注目する時、私達は小さな違和感を覚える。美德を信奉するジュスティーヌは、その性質がゆえに悪人の姦計に陥り、貧乏のどん底に突き落とされる。姉のジュリエットは犯罪と売春に手を染めた結果、富み栄えて何一つ不自由ない生活を送り、大臣の愛人という地位にまで上り詰める。確かにこの物語には、その他の作品同様、多くの迫害シーンが散りばめられている。しかし、ジュスティーヌを最終的に死へ至らせるのは、悪意に満ちた人間の手ではなく、空から落ちかかる雷なのである。なぜサドは、ヒロインの命を自然現象によって奪うことにしたのだろうか。悪事と見なされる人間の行為と、自然災害との関わりは、どのようなものなのだろうか。

ジュスティーヌとジュリエットの物語は繰り返し執筆された。サドはまず8ページからなる手帳に諸エピソードを素描し、物語の構想を練る（以下「最初の構想」）。1787年にはバス

ティーン牢獄の中で、この構想に基づいて、ジュスティーンの一人称によって語られる彼女の不幸に満ちた人生の物語を、『美德の不運』と題して書きあげた。フランス革命勃発後に釈放されたサドは、第一版に大幅に加筆・訂正を行い、『ジュスティーンあるいは美德の不幸』（以下『美德の不幸』）を1791年に出版する。1799年には、語り口を三人称に変え、第三版の『新ジュスティーンあるいは美德の不幸』（以下『新ジュスティーン』）を執筆し、これに姉のジュリエットの物語である『ジュリエットあるいは悪徳の栄え』（以下『悪徳の栄え』）を続編として付した。第二版から第三版へと至る中間状態を指すものとして、「『新ジュスティーン』のための101の覚書」と呼ばれる原稿が存在している。1801年にはサドはいかがわしい好色小説の作者として逮捕されたのだが、その際にも『新ジュスティーン』の新たな原稿を携帯していたことが知られている。

植田祐次は、「最初の構想」において計画されていた十のエピソードのうちの一つが、第一版では削除されていることに注目している。五番目の話では、教会の丸天井が崩れて、ミサを聞きに行った女主人公に重傷を負わせている。また八番目の話では、氾濫する急流を渡ろうとして、彼女が渡っている橋が突如崩壊する。「二つの破局では、悪を体現する人間の姿は明示されていなかった。ジュスティーンは人間とは無縁のたんなる偶然によって打ちめされたにすぎない<sup>4</sup>」と、植田は指摘する。これらの二つのエピソードは『美德の不運』には見られない。つまり第一版の執筆段階において、ジュスティーン物語は、美德がたまたま不運や事故に付きまわられて翻弄される話から、女主人公が人間の働く悪事によって、段階的に不幸に突き落とされる話へと変貌を遂げているのである。だが一方で、ジュスティーンの最期のみは、「最初の構想」から最後の版に至るまで一貫して、落雷によるものとされている。

なぜサドは、雷の描写にこれほど執着したのだろうか。そして、自然災害の持つ激しさと、サドが描く悪徳行為とはどのように結び付くのだろうか。本稿では、これらの疑問を解き明かすことで、サド文学の特色と見なされてきた暴力性について考察していきたい。

## 1、ヴァンセンヌ城とバステューヌ牢獄の雷

1772年6月に、サドはフランス南部の都市マルセイユで、私娼たちを相手に騒ぎを引き起こした。娼婦たちに配った娼薬入りのボンボンが腹痛を引き起こしたために、サドは毒殺未遂で訴えられる。この有名な「マルセイユ事件」は、サドがその後11年に渡って牢獄に幽閉されるきっかけとなった。逃亡と逮捕、脱走を繰り返した後、サドは1778年にパリ東部のヴァンセンヌ城に収監された。1784年にバステューヌ牢獄に移されるまで、サドはそこにとどまることとなった。

ジルベール・レリーの『サド侯爵の生涯』は、この時期のサドの生活と、彼の周辺で起きた出来事を詳細に伝えてくれる。それによれば、1783年の7月2日に、ヴァンセンヌ城の頂上に避雷針が設置された。そして、その日あるいはその翌日に雷雨が起こり、避雷針に雷が落ちた。「パリでは大惨事のように、この事件について話している<sup>5</sup>」と、レリーは述べる。サドの妻であるルネ夫人も、落雷のニュースを知って心配をし、彼の安否を尋ねる手紙を送っている。だが、妻に対するサドの返事は、この上なく苦々しいものであった。

お前の言う事件とは、いったい何のことだ。ここでは事件など、まるで感じもしなかった。7月2日に塔の上に避雷針が設置された。それが雷を招き寄せて、避雷針の先端に雷が落ちたにすぎない。当たり前のことではないか。それがどうしたというのだ。事件なんてものじゃない、ただの実験、簡単な実験だよ<sup>6</sup>。

同じ手紙の中でサドは、妻が落雷事件に気を取られて、牢獄に押し込められている夫の苦しみを忘れていることを責めている。当時、サドは獄中生活の中で、肉体的にも精神的にも、非常な苦痛を覚えていた。1779年から80年の冬には、囚人は医者を呼んで貰えないことを夫人に訴えている。楽しみであった散歩も、獄吏と大喧嘩をしたために何カ月にも渡って禁止されていた。同囚であったミラボーと罵り合いを繰り返したのも、この時期であった。妻に要求した書物の差し入れも制限され、1781年には面会も禁じられている。このような悪環境の中で、彼は執筆活動に取り掛かったのだが、それと同時に眼病も患うようになっていた。手紙の苦々しげな口調は、彼の苦しみの表れであったものと思われる。

だが、サドはこの落雷事件に何の興味も覚えなかったわけではない。彼はルネ夫人に次のように書き送っている。

それでもお前の手紙に、私は多少の感慨がなくもなかったね。実際、もしわたしが落雷で死ぬとすれば、これほど手軽な死に方はなかろう。あらゆる死に方のうちで、いちばん好ましい死に方ではないかと思うよ。なぜかといえば、それはまったく苦しみの伴わぬ、一瞬の出来事だからだ<sup>7</sup>。

落雷と死とを結びつけるアイデアを、サドはこの時点で抱いている。ここで雷は、この世における生の苦しみを絶ち切るものとして捉えられている。長い苦しみの末、雷によって落命するヒロインのモチーフが生まれたのに、ヴァンセンヌで体験したこの事件は無関係ではないものと推測される。

バステューユに移送されたサドは、1787年に『美德の不運』を執筆した。ヴァンセンヌ牢

獄内で書きためた下書きを元に、彼は20冊の手帳に作品をまとめていく。『美德の不運』は手帳の9, 10, 11, 12にまたがっている。手帳9には「6月17日」に書き始められたという覚書があるが<sup>8</sup>、手帳12の終わりには「1787年7月8日、15日で脱稿」と記されており<sup>9</sup>、実際はおそらく同年6月23日に書き始められたものと推測される。

『美德の不運』の雷雨の場面は、以下のように書かれている。

md de lorsange habitait enco/r le/a compagne, on etoit  
sur l/a fin de l'été on projettoit une promenade quum/ e cet affreux orage du juillet  
du 13  
juillet  
1788  
  
menacant  
orage affreux qui se formait paraissoit devoir déranger<sup>10</sup>

ロールサンジュ夫人はまだ田舎にいた。夏の終りであった。散歩の計画が立てられていたが、恐ろしい（荒れた）雷雨が起こり（1788年7月13日のあの恐ろしい雷雨が）、駄目にしそうであった<sup>11</sup>。

サドはジュスティヌの死のきっかけとなった雷雨について、「1788年7月13日のあの恐ろしい雷雨」と加筆している。これは、執筆して約1年ののちに、原稿に手を入れる機会があったことを示している。牢獄の窓から実際に眺め、「恐ろしい」という感慨を抱いた雷雨を、1年前に書いた雷雨の描写に重ね合わせることで、より鮮明なイメージを掴みとろうとしている様子を、そこから伺うことができる。このように、ジュスティヌ物語の結末部分における、雷と女主人公の死という組み合わせへのこだわりには、筆者自身が観察し、身を以て感じた体験が投影されている。

## 2, ベンジャミン・フランクリンの実験

古典主義期の文学では、例えばモリエールの戯曲『ドン・ジュアン』（またの名を『石像の宴』。1665年にパレ・ロワイヤルで初演）のように、罪人に下される雷の天罰がしばしば取り上げられる。現在でもなお色男の代名詞であるこの貴族は、次々に女性を口説き落とし、誘惑する。鈴木力衛によれば、スペインに端を発したドン・ジュアン劇は、イタリアで即興劇として演じられた後、17世紀半ばにフランスに紹介されたという<sup>12</sup>。

無神論者であると同時に偽善者でもあるドン・ジュアンの前に、神の訓戒を示すべく、彼が殺害した騎士の石像や亡霊が現れる。彼の父ドン・ルイは「神のお怒りの落ちる前に<sup>13</sup>」自分が懲らしめてやると述べて、息子の放蕩ぶりに対して怒りをあらわにする。ドン・ジュアンの従者スガナレルは、「神様がだんなさまのお暮らしぶりに腹をお立てになった<sup>14</sup>」のだとして、生活を改めるように懇願する。しかし、ドン・ジュアンはあらゆる忠告に耳を貸さず、神をも恐れない人物として描かれている。戯曲のクライマックスは次のようである。ドン・ジュアンはかつて殺した騎士の石像によって、宴に招かれる。

石像 ドン・ジュアン、罪業が凝っては、不吉な死を招く。天の恵みを拒絶すれば、その雷に道を開く。

ドン・ジュアン おお、神よ！なんという気持ちだ！目に見えぬ火がおれを焼く、もうたまらぬ、体中が燃えさかる炎になる。ああ！

(大きな音と閃光とともに、雷がドン・ジュアンの上へ落ちる。大地が裂け、ドン・ジュアンを呑む。彼が落ちた場所から大きな炎が吹きだす)<sup>15</sup>

17世紀半ばには、このように、落雷は神によって悪人に課せられた懲罰であると見なされていた。だが、18世紀に入ると、科学の発展に伴い事態は変化する。1752年、米国の科学者ベンジャミン・フランクリンは雷を伴う嵐の中で凧をあげ、凧糸の末端にワイヤーで接続したライデン瓶<sup>16</sup>により、雷雲の帯電を証明するという実験を行った。この実験が雷の正体を電気であることとつぎとめたことにより、それまでの落雷に対する考え方は大きく変わり、神の怒りとの因果律は次第に求められなくなった。フランクリンはまた、避雷針の発明者としても知られている。

この時代のヨーロッパにおいても、理性を啓発することによって人間生活の進歩・改善を図り、科学的明証性によって物事を考察・判断しようという試みがなされていた。百科全書を参照してみよう。百科全書の「雷」の項目には、「雷の素材は電気の素材と同じであるように思われる<sup>17</sup>」と記述されている。さらに同項目の「文学」と銘打った記載には、以下のように書かれている。

雷、(文学) 雷が生み出す驚くべき効果は、いつの時代にも人々の迷信に豊富な材料を提供した。(略) 雷によって死去した不運な者達は、概して極悪人や不信心者で、神の罰を受けたのだと見なされてきた。皇帝カルス<sup>18</sup>が勇気と美徳に溢れていたのに、幾人かの作家たちによって邪悪な君主の一人と考えられたのは、このような理由による<sup>19</sup>。

百科全書は、この時代の知のあり方を示す、一つの例証に過ぎない。しかしこの例により少なくとも、雷の現象に対する考え方に、少しずつ変化が訪れていたことを私達は知ることができる。雷は純粹に自然現象と受け止められるようになり、古典主義的な捉え方は迷信と見なされるようになっていく。

サドは雷の実体について、どれほどの知識を有していたのだろうか。ヴァンセンヌ城への落雷について述べた妻への手紙の中で、彼は「実験」という言葉を繰り返し用いている。これはフランクリンの凧の実験をも含めた、雷の科学的実験のことを指しているのだろう。独立戦争中にパリ社交界を中心に活動し、ヴォルテールとも交友のあったフランクリンの名は、欧州でも広く知られていた。

雷に関わる実験はジュスティーヌ物語に幾度か登場する。「ジェローム物語」と呼ばれる挿話を例にとってみよう。ジュスティーヌは救いを求めて向かったサント＝マリー＝デ＝ボワ修道院が、悪徳修道士たちの巢窟であったことを知る。第一版と第二版には4人、第三版には6人の修道士が描かれている<sup>20</sup>。第三版『新ジュスティーヌ』では、修道士ジェロームは皆に求められて、自分の半生を語ってきかせる。これは本編からは独立したエピソードであり、『美德の不運』と『美德の不幸』には存在しない内容である。

ジェロームは、エトナ山を探検した折に出会った、アルマニと名乗る不思議な化学者について語る。ジェロームは火山のように、周囲のものを一呑みにできる破壊的な力を欲していた。アルマニは自然を研究し、その秘密を盗むことに人生をかけてきたのだと語り、火山の爆発を人工的に真似ることは可能だと、ジェロームに告げる。アルマニは手始めに幾つかの実験をやってみせるが、その中には雷に関わるものも含まれている。

彼（アルマニ）は一本の糸を用いて、16歳ばかりの美しいナポリ女の頭上に雷火を呼びよせて、これを死なせるという離れ業をやってみせた。また、彼はもう一人の女を電気で撃ち、恐ろしい苦悶のうちに絶滅させた<sup>21</sup>。

糸を使って雷を引き寄せるというやり方は、フランクリンの実験と明らかに酷似している。『悪徳の栄え』に登場する、物理学者のブラッチアーニ伯爵も同様の実験を行う。

ブラッチアーニは彼女（犠牲者）の身体を使って二・三回、物理学上の実験を行いました。最後の実験は人工的に雷を生ぜしめ、一瞬にして彼女を粉微塵にしてしまおうというものでした。こうして彼女はむごたらしい最期をとげました<sup>22</sup>。

これらの記述は、明らかにサドが雷の正体を知っていたことを示している。ここで、ジュスティヌ・ジュリエット物語の各版における、ジュスティヌの最期の様子に注目してみたい。物語の執筆計画を記した「最初の構想」では、以下のような筋書きが素描されている。

雷が落ちて、彼女（ジュスティヌ）を押しつぶす。あまりにも荒々しく、奇妙であるとロルサンジュ夫人（ジュリエット）は言う。神の摂理が、美德にのみ仕える者をこれほど残酷に、公平さもなしに罰すると考えるのは、自然ではない。それは私に畏怖の念を起こさせます。それは間接的に神の怒りが私を打ちのめすのです<sup>23</sup>。

上記の引用文において、「間接的」という言葉が我々の注意を引く。雷は「神による罰」とであると捉えられているが、それは「直接的に」罪を犯した者（ジュリエット）へ向けられることはなく、美德の徒であるジュスティヌに落ちかかり、死へと至らしめるものなのである。「最初の構想」で示された、雷に与えられた役割のこの曖昧さは、後の版における結末の変化の布石となるものである。

『美德の不運』と『美德の不幸』では、ジュリエットは妹の死を目の当たりにして、次のように語る。

この魅力的な娘を襲った信じがたい災難、ひっきりなしに続く恐ろしい不運は、自分の良心の声に耳を傾け、最後には神さまの腕の中に身を投げよという、神様が私にお与えになる警告にはかなりません。人生のどの瞬間にも放埒と不信仰とあらゆる道義心の放棄の痕跡を残してきた私ですから、神さまからのどんな処罰を恐れなければいけないのでしょうか。生涯に自らとがめるべき本当の過ちを一つも犯したことのない娘がこのように扱われるのですもの<sup>24</sup>。

ここでも一見、「落雷」は「神さまからの処罰」を意味している。しかし「最初の構想」の覚書が暗に示していた疑問に、我々は再び向き合わなくてはならない。過ちを犯したことのないジュスティヌが罰せられる姿は、悪人に悔悛の念を起こさせ、改心するきっかけとなる。だが一方で、悪徳の道を歩んできたジュリエットが、神の御業によって罰せられることは決してないのである。

ピエール・クロソウスキーは、『美德の不運』は「罪ある者のための無実の者の犠牲<sup>25</sup>」というキリスト教の根本的教義を謳った作品であると述べ、「贖罪」という宗教的テーマを「迫害される美德と、繁栄する悪徳」という命題の根底にあるものと見なしている。確かに、ジュスティヌは敬虔なキリスト教徒である。また、18世紀フランスでは、美德に課される試練



と、神によるその報いをテーマとする作品が多く書かれていた。サドの小説もこの流れの一端を汲むものではある<sup>26</sup>。しかしこれらの説明だけでは、悪人が決して罰せられない様を、サドが殊更に強調し続ける理由を明らかにするには不十分である。

ジュスティーヌを迫害した者たちはついで制裁を受けない。『美德の不運』と『美德の不幸』では、彼女は姉と再会して、一時の平穏を得ることができる。姉とその恋人コルヴィル氏の奔走のお陰で、ジュスティーヌの名誉は回復される。だが同時に、「彼女を迫害したすべての者たちに結び付けられる星回りによって<sup>27</sup>」、悪人達が一層の幸運に恵まれたことも強調されるのである。例えば、カルドヴィルとサン・フロランという二人の放蕩者はすべての追及を逃れ、高い社会的地位を得ることに成功する。彼らに対して発行された逮捕状は、「権威ある一族と衝突することになったにすぎず、その一族は雷雨を静める手立てをすぐさま見つけ<sup>28</sup>」てしまう。

ここで「雷雨 (orage)」という比喩表現が用いられているのは、決して偶然ではない。サドは「雷」や「雷雨」にまつわる表現を、巧みに文中や会話の中に織り込んでいる。例えば、ある女泥棒はジュスティーヌの信仰心を否定して、なぜ神はこの世に悪がはびこるのを容認しているのかと問いかける。神がこの世の悪や無秩序を命じているのであれば、残忍な存在であるということになるし、それらを防ぐことができないのなら無力な存在ということになる。さらに彼女は、「いずれにせよ、神なんておぞましい存在だから、あたしはそいつが落とす雷などものともせず、そいつの掟を軽蔑してやらなければならないのさ<sup>29</sup>」と付け加える。神の力は「雷」という表現によって、侮蔑の念を込めて語られている。

ジュスティーヌ自身も、悪人達の繁栄を目の当たりにして、おもわず雷について口走ることがある。裁判官カルドヴィルは彼女を散々に痛めつけ、濡れ衣を着せて犯罪者に仕立て上げる。牢の中でジュスティーヌは次のように叫ぶ。「極悪人は安心して立ち去ります…雷が彼を打ち砕くこともないのです<sup>30</sup>！」一方で彼女は自分自身の不幸さを、自分は「まるで道に迷った旅人が震えながら稲妻を見るようにしか太陽を見たことがない娘<sup>31</sup>」だということによって表す。これらの、「稲妻」や「雷雨」を利用した例えは、結末における「有徳者の落雷死」の皮肉な伏線となっている。

ジュスティーヌ物語の最初の二つの版では、悪人の富み栄える様を見せられ続けても、ジュスティーヌが信念を曲げることはない。神の善良さと来世における幸福の約束を、彼女はどこまでも信じ続ける。ところで、第三版『新ジュスティーヌ』においては、結末は異なる。悪人たちに雷が落ちかからないことを知ったジュスティーヌは、一旦はこの世での生を諦めかけるものの、盗みを働くことと引き換えに自由にしてやろうという牢番の誘惑にのってしまい、ついに隣の死刑囚の財布に手をかけてしまう。彼女はこうして、信念として主張し続けてきた美德に背く行動を取ってしまうのである。

『新ジュスティーヌ』の続編『悪徳の栄え』にも、注目すべき雷雨の場面が登場する。ある雷雨 (orage) の日に、ジュリエットは四人のヴェネチア人女性と共に、ゴンドラで遊びにでかける。「稲妻が雲にひらめき渡り」、「雷鳴が聞こえる<sup>32</sup>」状態の中で、彼女達は沖に舟を進める。ゴンドラの中で、みだらな行いに耽りながら、悪女たちは神を冒瀆する言葉を吐いてみせる。雷鳴がとどろき、いたるところに雷が落ちる。ゴンドラは流れに翻弄されて、流されていく。しかし、これほど危険な状況にあっても、彼女達は決して傷つけられることはなく、雷が彼女達に落ちかかることはない。

このゴンドラの場面も、結末への伏線だと読み解くことができるだろう。『悪徳の栄え』の最終場面では、ジュリエットの城の外では、「稲妻が光り、風が鋭い音を立て、天の雷火が雲を揺るがせて<sup>33</sup>」いる。この场景描写は、先ほどのゴンドラの場面の荒々しさと呼応する。ジュスティーヌと遊び仲間たちは、雷を利用して、運命を試してみることにする。ジュリエットの恋人ノアルスイユは、ジュスティーヌが雷に打たれて死ななければ、改心すると宣言する。『美徳の不運』と『美徳の不幸』では、ヒロインの死こそが悪人に悔悛の気持ちを起こさせるものであったが、ここではその逆であり、ヒロインが生きのびることが悪人の改心の条件となり、落雷がもたらす死は「美徳の骨折り損」を証明するための道具となるのである。焼け焦げた妹の遺体を前にして、ジュリエットは次のように叫ぶ。

かつてないほど、私が生涯辿ってきた道に打ち込む決意が固くなったわ。おお、自然よ！  
お前の計画には犯罪が必要なのね。(略) お前は犯罪を望んでいるのだわ。犯罪をおそれ、  
犯罪に没頭しようとしなない人達を、お前はこんな風にして罰するのですもの<sup>34</sup>。

ジュスティーヌ物語の最初の二版においては、雷は神によって下される罰であるという、古典主義的な雷の解釈が用いられていた。とはいえ、サドは雷の正体が電気であることを、明らかに知っていた。物語のところどころで—ある時は比喩的に、ある時は暗示的に—、雷が悪人を撃たないことが示され続ける。そして、第三版を経て『悪徳の栄え』に行きつくにいたって、もはや神の罰について言及されることはなくなってしまふ。裁きを下す者としての「神」に代わって出現したのが、「自然 (la Nature)」という表現であり、それは犯罪を自らの意図として含むものであると語られる。こうして、サドは、神が雷によって悪を罰するという伝統的な言説を利用しつつも、それが本来示していたはずの内容を反転させて有徳者に苦痛を与え続ける。そして、最終的にはその言説自体を放棄してしまうのだ。

## 自然現象とサド

サドは雷以外の自然現象にも興味を持っていた。とりわけ『新ジュスティーン』と『悪徳の栄え』の中では、火山や地震といった災害が取り上げられている。例えば、修道士ジェロームはエトナ火山の山麓で、アルマニと出会っていた。また、ジュリエットは大臣サン・フォンの手を逃れて、イタリアに逃亡するのだが、その際に幾つかの火山を見学している。

サドは1774年の末に少女達とスキヤンダルを起こし、1775年5月に召使のカルトロンを伴って、急遽イタリアに向けて逃亡の旅に出かけた。旅行中に味わった強烈な印象、なかんずくヴァチカン美術館やナポリのヴェスヴィオ火山、ポンペイの廃墟などの印象を、彼は『イタリア紀行』に書き記している。そして、この紀行文の内容は、『悪徳の栄え』のジュリエットの旅行シーンに反映されている。「サドの『紀行』は彼の主要作品『ジュリエット物語』と表裏の関係にある<sup>35</sup>」と、谷口勇は述べる。

この旅行体験が、サドの火山への興味を掻き立てたことは容易に推測される。後にヴァンセンヌの牢獄内にあって、サドはカルトロンに手紙を書き、1779年8月に起きたヴェスヴィオ火山の噴火に関する資料を筆写させて、自分のもとへと送らせている<sup>36</sup>。

ここで『悪徳の栄え』に書かれている、ヴェスヴィオ火山の話を参照してみたい。ジュリエットと女友達クレールウィルは、ヴェスヴィオ火山の火口にボルゲーズ侯爵夫人を投げ込んで殺害する。犯したばかりの罪に興奮した二人の悪女は、神や自然を冒瀆する言葉を吐いて散々罵倒するが、なんの罰も受けることはない。興奮から冷めたクレールウィルは以下のように述べている。

私達の上に自然の怒りを招き寄せる罪など、この世にはないのよ。(略) あらゆる罪が自然の役に立ち、あらゆる罪が自然にとって有益なのよ。自然が罪を私達に吹き込む時には、自然がそれを必要としていることを疑ってはいけないわ<sup>37</sup>。

犯罪を自然の必要に添ったものだとするこの意見は、ジュスティーン死に際したジュリエットの自然に対する呼びかけと共通点を持つ。この「自然 (la Nature)」とは、サドの思想を理解する上で重要な概念である。それは18世紀に唱えられていたドルバックやラ・メトリの唯物論やスピノザ主義の影響を濃く受けた言葉で、すべての個物や現象、運動を起成させる統一体（原因）を指している<sup>38</sup>。サドは登場人物の悪人の一人に、この二人の哲学者たちの原理を身につけておくよう述べさせてさえいる。スピノザは「自然」について、それが人間にとって有益なもののみを生みだすとするのは、間違いだと指摘をする。「自然におけるかくも多くの有用物の間にまじって少なからぬ有害物を、例えば暴風雨・地震・病気などな

どを彼ら（人間）は発見しなければならなかった<sup>39</sup>」と彼は述べる。言い換えれば、自然は、人間にとって害になるものをも起成させる原因であるのだ。また、18世紀機械論的唯物論者の代表者ともいえるドルバックは、自然にとってすべての現象・出来事は必然であると説く。

動乱、風、嵐、病気、ペスト、死は、太陽の恵みの熱、清澄な大気、温和な春雨、豊年、健康、平和、生命と同時に、自然の進行にとって必然的である。悪徳と美徳、闇と光、無知と知識は等しく必然的である。前者が善、後者が悪であるのは、それらがその生存の仕方にプラスかマイナスになる個々の存在にとってのみ、そうなのである<sup>40</sup>。

スピノザとドルバックに共通しているのは、人間にとって不都合なものの例として自然災害を挙げていることである。人間存在にとって役に立たないものを悪とするならば、自然災害もまた悪であり、人間の悪徳と並べうるものとなるだろう。見方を変えれば、人間は自らの都合によって善悪を定義し分けているだけとも言える。サドの悪人たちは、二人の哲学者達同様に、しばしば自らの犯罪を病気や災害に例えて話す。例えば、ジュリエットに最初の悪徳教育を施したデルバース夫人は、犯罪を「戦争やペストや飢餓<sup>41</sup>」のように必然的なものであると説いて、自らの犯罪を正当化している。

ここで注意しなくてはならないのは、サドの悪人たちが自然災害を引き合いに出しつつも、その破壊的な力に常に好意を抱いているわけではないということである。『新ジュスティース』に登場する科学者アルマニは、自然について研究を重ね、その恐ろしい秘密によく通じている。だが、彼は自然の力に対する嫌悪の情を露わにする。彼が行う悪事は「自然の悪意を模倣すること<sup>42</sup>」であり、そのこと自体には愉悦を覚えている。しかし一方で、彼は「わたしは自然を憎みながら、その模倣をする<sup>43</sup>」とも述べている。自然の持つ暴力性に倣って犯罪に手を染めながらも、彼がこのように発言する理由は何なのだろうか？ アルマニは自然の力について、次のように述べる。

いかさま自然の力はわたしなどより数倍も優れていて、この闘いは釣り合いません。自然はその作用をわたしの目に見せるばかりで、その原動力は常に覆い隠しております。したがって、わたしは自然の作用の真似をすることしかできないのです<sup>44</sup>。

このように、悪人たちは自然災害が示す暴力性や破壊性を「真似」して、悪事を働こうとする。しかし、彼らの目に移るのはその力の「作用」や「結果」のみであり、原因は分からず、自然に対抗することはできないのである。そのことがアルマニをいらだたせる理由となっている。言い換えれば、彼ほど優秀で、迷信に囚われない化学者にとっても、自然の力は依

然として謎であり、理解を越えるものなのである。

アルマニが科学の力を用いて、様々な実験を行ったことを、私達はすでに見た。その中には、雷を呼びよせるものも含まれていた。更に彼はジェロームの要望に答えて、水と鉄鏝屑と硫黄を練ったものを発酵させ、地中に埋めて大爆発を生じさせる<sup>45</sup>。『美徳の不幸』から『新ジュスティーヌ』への橋渡しを務める『『新ジュスティーヌ』のための101の覚書』には、この悪事について「激しい大地震を引き起こすために、そこ（エトナ）で見つけた化学者と共に彼（ジェローム）が企てた密計<sup>46</sup>」と記されている。つまり、大勢の命を奪うことに成功したこの大悪事も、地震という災害の破壊力を真似ようという試みであった。

「101の覚書」の記述は、1755年にリスボンでおきた大地震を思い出させるものである。津波による死者1万人を含む、5万～6万もの人が逝去したこの災害の衝撃が、ヨーロッパの思想に与えた影響は大きかった。敬虔なカトリック国であるポルトガルの首都リスボンが破壊されたことは、神の善良さや慈悲深さを疑わせるものであり、当時の神学では説明のつかない出来事であった。当時、多くの哲学者たちがこの地震に言及している。とりわけ有名なのはヴォルテールである。彼は『カンディード』や『リスボンの災害についての詩』を著し、特に『カンディード』では、主人公の不運－大地震との遭遇を含む－を追うことで、あらゆる出来事は神によって人間の善のために組織されているとする、ライプニッツ流の最善説を否定している。また、カントは人間の力の及ばない自然の巨大さに対する時の感情である「崇高さ<sup>47</sup>」という概念を、リスボン地震の被害の甚大さを理解しようと試みの中から発展させた。

1740年生まれであるサドは、リスボン地震勃発時には15歳になっている。ヨーロッパ全土を震撼させたこの出来事を、現実感を持って受け止めたに違いない。また彼はイタリア旅行中に、火山の観察をし、噴火によって滅びたポンペイの町も訪れている。ヴァンセンヌ城に落ちた雷や、バスティーユ牢獄の苦しみの中で眺めた雷雨も、直接的な体験として自然の破壊力をサドに感じさせた。サドは火山や地震、雷の描写を、物語の中へ取り込んでいく。悪人達が起こす犯罪は、この暴力性の模倣である。より詳しく言えば、彼らは自然の暴力性を大なり小なり真似ることはできても、その原因の全てを理解することはできない。そして、人間の理解を越える力の存在を認めるのは、人知と人間の価値判断の物差しに、疑問を投げかけることでもあるのだ。

## まとめ

サドは「迫害される美德と、繁栄する悪徳」というテーマに固執し、美德の徒ジュスティーヌと悪徳の道を歩むジュリエットという姉妹の物語を、幾度も著した。この物語のクライマックスは、ジュスティーヌが落雷によって絶命する場面である。我々は過激な結末に、様々な要素を読みとることができる。

ジュスティーヌの死が悪人を改心させるという結論を持つ『美德の不運』と『美德の不幸』では、雷を神からの警告・罰と見なす古典主義的モチーフが踏襲されている。だが、よく考えれば、この物語内では悪人は決して罰されず、神の警告はジュスティーヌを始めとする犠牲者たちにもみ発せられている。我々はこのような書き方に、矛盾を感じずにはいられない。そして『新ジュスティーヌ』に続く『悪徳の栄え』の結末では、悪人が美德の死によって改心することはなく、もはや神の怒りについて語られることもなくなるのである。

科学的明証性と合理的な知を重視し、旧来の宗教的權威の支配や迷信から抜け出そうとしつつあった18世紀後半において、雷の正体が電気であるということは実験によってすでに明らかになっていた。サドもしばしば、雷と電気の実験との関連について言及している。だが一方で彼は、人間の知や理性といったものを過信しているわけではなかった。

サドはその生涯において、火山や地震を通じて、自然のもつ破壊的な力に接する機会を幾度か有していた。牢獄の中で眺めた雷雨は、ジュスティーヌの最期の場面と重ねあわされる。そして、版を重ねるごとに、押しつぶされたジュスティーヌの身体はよりひどい状態で描かれることになる。黒焦げになった遺体の描写は、抗することのできない圧倒的な自然の力の存在を示している。

サドは自然現象の科学的説明を受け入れるが、一方で学者たちが自然の力の全てを理解しているわけではないことも承知している。ジュスティーヌ・ジュリエット物語に登場する悪人たちは、自然災害を引き合いに出して、自らの犯罪を正当化し、説明しようとする。人間にとって有益なものも有害なものも、自然の中から必然的に派生してくるものであると彼らは述べる。いうなれば、人間は自らの都合で、善や悪といった価値を振り分けているのであって、自然においてはその区分は不変的でも、絶対的なものでもない。そして、人間の価値判断や概念を越えた出来事というのは、しばしば起こり得るものなのである。悪人達は、自然の本質を必ずしも理解しないままに、しかしその暴力性を模倣する。こうしてサドは、宗教的にも、科学的にも、道徳的にも説明しえず、説明や解釈の及ばない領域を示すのである。

註

- 1 サドは1814年に死去した。2014年には、没200周年をきっかけに、サドに関わる題材を広く扱ったシンポジウムがフランスやカナダで開催された。
- 2 鈴木創士, 「ブルトン (《サドはサディズムにおいてシュルレアリストである》), エリュアール, あるいはアラゴンの語ったような, フランス革命とサドの完全にポジティブな関係を宣言するような見解に対して早くから異を唱えていたのは, 恐らく『サド侯爵の生涯』のジルベール・レリー (ある意味でそれはこの本が敬遠され, 遠ざけられてきた理由のひとつである) と『文学と悪』のジョルジュ・バタイユだけであったことを思い出しておくのも無駄ではないだろう。」「訳者あとがき」, フィリップ・ソレルス著『サド侯爵の幻の手紙』せりか書房, 1999年。
- 3 フィリップ・ソレルスはサディズムの解釈について, 以下のように述べる。「こうして振りだしに戻ったわけだ。つまりサドの本はひとつの小児病の例証であって, 啓蒙思想の広がりも, 真の文学のそれも, 自分のもんとして要求することはできない。」Philippe Sollers, *Sade contre l'Être suprême, précédé de Sade dans le Temps*, Gallimard, 1996, p.12.
- 4 植田祐次, 『ジュスティヌまたは美徳の不幸』「解説」, 岩波文庫, 2001年, p.579.
- 5 Gilbert Lely, *Vie du marquis de Sade*, Jean-Jacques Pauvert, 1965, p.369.
- 6 Lettre de Sade adressée à sa femme entre le 3 et le 11 juillet 1783. Voir, *Œuvres complètes du Marquis de Sade*, tome XII, Définitive, le Cercle du livres précieux, 1962-1964, p.390.
- 7 *Ibid.*, p.391.
- 8 「最初の構想」と『美徳の不運』の草稿は, ジャン・クリストフ・アブラモヴィシ校の *Les infortunes de la vertu* を参照した。Sade, *Manuscript des infortunes de la vertu*, CNRS Edition, 1995, Zulma, 1995, p.68.
- 9 *Ibid.*, p.138.
- 10 *Idem.*
- 11 *Idem.*
- 12 鈴木力衛, 『ドン・ジュアン』「解説」, 岩波文庫, 1952, p.109.
- 13 *Œuvres de J.B. Poquelin Molière, Don Juan* (1665), Tome 13, De l'imprimerie de mame, 1810, p.83.
- 14 *Ibid.*, p.71.
- 15 *Ibid.*, p.104.
- 16 静電気を滞留させることのできる, ガラス製の装置。
- 17 *Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences des arts et des métiers*, vol 7, Stuttgart-Bad Connstatt, 1995, Friedrich Frommann Verlag, p.213.
- 18 マルクス・アウレリウス・カルス (在位282 ~ 283年), ローマ帝国の皇帝。ペルシャ遠征中に, ティグリス川沿いの駐留地にて落雷に逢い事故死し, 短い治世を終えた。
- 19 *Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences des arts et des métiers*, *op. cit.*, p.215.
- 20 『美徳の不運』には, クレマン, ラファエル, ジェローム, アントナン, 『美徳の不幸』には, クレマン, ドン・セヴェリーノ, ジェローム, アントナンの4人の修道士が登場する。『新ジュスティヌ』には, クレマン, ドン・セヴェリーノ, ジェローム, アントナン, シルヴェストル, アンブロワーズの6人の修道士が登場する。
- 21 Sade, *La Nouvelle Justine*, Bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1995, p.780.
- 22 Sade, *Histoire de Juliette*, Bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1998, p.845.
- 23 Sade, le plan primitif des *infortunes de la vertu*, CNRS Edition, 1995, Zulma, 1995, p.823.
- 24 Sade, *Les Infortunes de la vertu*, Bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1995, p.120. *Justine ou les Malheurs de la vertu*, Bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1995, p. 389.

- 25 Pierre Klossowski, *Sade mon prochain*, Seuil, 1967, p.96.
- 26 Voir Tamako Suzuki, « Les épreuves de la vertu -Richardson, Diderot et Sade- », in *Études de langue et littérature françaises*, 2015, pp.19-37.
- 27 Sade, *Justine ou les Malheurs de la vertu*, *op. cit.*, p.387.
- 28 *Idem.*
- 29 *Ibid.*, p.350.
- 30 *Ibid.*, p.383.
- 31 *Ibid.*, p.385.
- 32 Sade, *Histoire de Juliette*, *op. cit.*, p.1221.
- 33 *Ibid.*, p.1258.
- 34 *Ibid.*, p.1259.
- 35 谷口勇『イタリヤ紀行』「解題」, ユーシープランニング, 1995年, p.322.
- 36 Voir, Lettre du 14 septembre 1779 de Cartron adressée au marquis, in *Correspondances du marquis de Sade et de ses proches enrichies de documents, notes et commentaires*,
- 37 Sade, *Histoire de Juliette*, *op. cit.*, p.1102.
- 38 鈴木球子「ジュスティーナ・ジュリエット物語における唯物論的『自然』観」, 『日本フランス語フランス文学会 中部支部会 研究報告集 No.36』, 2012年, pp.23-38, 参照。
- 39 Spinoza, *Éthique* (1677), Gallimard, 1954, p.65.
- 40 D'Holbach, *Système de la Nature* (1770), Chapitre 12, coda, 2008, pp.153-154.
- 41 Sade, *Histoire de Juliette*, *op. cit.*, p.190.
- 42 *Ibid.*, p.779.
- 43 Sade, *La Nouvelle Justine*, *op. cit.*, p.778.
- 44 *Ibid.*, p.780.
- 45 この箇所は、ドルバックの『自然の体系』第2章の記述を反映している。「鉄鋸屑と硫黄と水を一緒に混ぜ、相互に混ざりあうようにすると、それらは徐々に熱を帯び、ついには燃焼を起こす」 Voir D'Holbach, *Système de la nature*, chapitre II, *op. cit.*, p.20.
- 46 Sade, *Cent onze notes pour la Nouvelle Justine*, Note XIX, in *Œuvres complètes du marquis de Sade*, tome VII, Au cercle du livre précieux, MDCCCCLXIII, p.435.
- 47 「崇高 (sublime)」とは、人間の力の及ばない巨大さなどへ対する感情である。カントは1764年の『美と崇高の感情に関する考察』において、崇高の概念を論じた。サドは「小説論」の中で、崇高に言及している。ミシェル・ドロンはサドの用いる崇高の意味について、「道徳のカテゴリーを越えたもの」と述べている。 Voir, « Notes » dans *Les Crimes de l'amour*, Gallimard, 1987, p.422.